

陳元贊の伝記及び江戸初期の日中文化交流についての一考察

——内閣文庫蔵『陳元贊書翰』を中心に

李 麗

中国哲学専門 博士後期課程 2年

はじめに

陳元贊(1587-1671)の伝記に関しては、原念齋(1774-1820)の『先哲叢談』がよく知られているが、原念齋とはほぼ同時代の尾張藩士中山和清(1765-1829)の『諸士伝略稿』¹⁾にも言及がある。『諸士伝略稿』では出典を明記しているため、本稿は『諸士伝略稿』の記述を抜粋して以下のように紹介しておく。

陳元贊、字は義都、号は既白山人であり、明国の杭州の人である。幼少から聡敏であって、経学と歴史に精通していた。又、書道に巧みで、趙孟頫の書体を規範とし、大いに風致があった。やがて敬公(尾張藩初代藩主徳川義直)が彼の名声を聞き、客として陳元贊を招き、優遇し顧問役に充てた。元贊は知遇の恩に感謝し、心を尽くして、敬公に仕えたが、慶安3(1650)年、敬公は亡くなった。瑞龍公(二代藩主徳川光友、字は子龍)は、敬公を水野定光寺に埋葬した。墓碑の題字「従二品前亞相尾陽侯源敬公墓」の13字は、元贊が命を受けて書いた。これより以前、元贊はしばしば京都へ往来し、石川丈山、鶴飼真昌、及び僧元政等と、詩文や学問などで交際し、みな元贊を「白眉」(最も傑出している人)と推挙した。その贈答の詩文は、『虎林詩文集』及び『元元唱和集』に見える。寛文11(1671)年6月9日、病で名古屋城の東にある九十軒町というところで亡くなった。享年85歳、建中寺に葬られた²⁾。

陳元贊は多芸の才子と言われ、書道、詩文のほか、「元贊焼」と呼ばれる陶器の作り方など、様々な分野において尾張藩に貢献した人物である。代表作は『老子経通考』がある。

陳元贊は元和5(1619)年33歳の時に来日し、日本の諸名士と交友したが、その中で、一番の親友といえれば、元贊が73歳の時に出会った元政上人である。二人は漢詩の唱和によって親交を深め、わずか十年くらいの交際だが、陳元贊にとって生涯の知己であった。

元政上人については、『草山集』寛文9(1669)年、通憲の「行状」では、以下のように述べている。

「積日政、字は元政、自ら妙子と号す。或は不可思議と号し、又は泰堂と号す。姓は菅原、氏は石井。母夢みらく、一の高僧来たりて頼もしきかなと日ふ。覚めて後振むこと有り(中略)日蓮上人の像を拝して自ら三願を發す。一に我必ず出家せん、二に父母の寿長くして我孝心を竭さん、三に天台の三大部を閲せん。(略)政二十六歳自ら祝髮して出家す。妙顯寺日豊上人に従ひて師資道契ふ。幼齡にして親の舎に在りし日、常に法華を誦す。果して三大部を閲す。(略)是の故に内外の二典に涉獵し兼ねて能く日本の書記に通ず。実に般若の種智を薰習するの深きに非ずんば、焉んぞ能く此の如くならん。(略)遺集三十卷世に伝はり、草山集と日ふ。生平の著述は、釈氏廿四孝一卷、龍華歴代師承伝一卷、同鈔一卷、本朝法華伝三卷、小止観鈔三卷、草山要路一卷、身延行記一卷、称心病課一卷、元元唱和集二卷、扶桑逸伝三卷、聖凡唱和一卷、如来秘蔵録一卷、食医要編一卷及び校定する者の甚だ多し、尽く記せざるなり。(略)」

陳元贊は晩年『老子経通考』という書物を著し、「彼の生死観には道教に根ざした深遠なものがあり」³⁾と評された人物である。一方、元政上人は仏教の日蓮宗の僧であり、元贊より36歳も年下である。二人の漢詩の唱和集『元元唱和集』が寛文3(1663)年に刊行され、二人の交友は当時の美談となった。筆者は陳元贊と元政の交流に焦点を当てて、二人の交流を明らかにすることによって、江戸初期の日中文化交流の一角を明らかにすることをめざしている。

筆者は2015年7月1日～4日に、陳元贊の著作、書牘の収集及び一次資料の内容確認のため、国立公文書館、大東文化大学板橋図書館、文教大学越谷図書館、国立国会図書館などの文献資料調査を実施した。この調査で国立公文書館にて内閣文庫蔵『陳元贊書翰』、すなわち陳元贊が元政上人に宛てた手紙を取録したものを新たに入手した。陳元贊と元政の交友に関する資料は本書翰のほか、元贊と元政の共著『元元唱和集』、元政の『草山集』に見える元贊宛の書翰及び和韻詩、瑞光寺草山文庫所蔵の陳元贊尺牘の真跡など

があり、これらの資料により総合的に考察すべきだが、本稿は調査報告書として今回の調査で一番の収穫である内閣文庫蔵『陳元賛書翰』について報告することにしたい。

一 内閣文庫蔵『陳元賛書翰』の識語

内閣文庫蔵『陳元賛書翰』一冊、請求番号364-0020(函号364架20)、大きさ8.9×27.4、厚さ約0.8ミリで紺色の虫食いが酷く、書翰の終わりに続いて、次の頁に「以龍翔之蔵書寫之于時⁴⁾延寶九丁酉夷則上旬」とある。これによれば、本書翰は陳元賛が自ら書いた書翰の原本ではなく、「龍翔」⁵⁾の蔵書から、抄写したものであることが分かる。

抄写した日付に関しては、まず「夷則上旬」は7月上旬のことである。問題は「延寶九」年と「丁酉」年が同じ年を表していないことである。「延寶九」は西暦1681年で、干支でいうと「辛酉」である。「丁酉」は、明暦3年の1657年、享保2年の1717年、或は安永6年の1777年を表す。明暦3年は陳元賛がまだ元政上人に出会っていないことから、排除できるので、1717年か1777年のどちらかと思われる。小松原氏は『陳元賛の研究』の中で「以龍翔之蔵書寫之。于時延寶九丁酉夷則上旬、」と「之」の字で句を切って、この不一致に言及せず「元政逝いて十三年後、恐らく日宗の僧侶か誰かの手写になるものであろう」⁶⁾と、本書翰は延寶9(1681)年誰かに抄写したものと見てゐる。恐らく「丁酉」は「辛酉」の誤りの可能性が高いと思われる。

日付に続いて、さらに「本書誤字行々多紛擾後/来者訂正之可乎」と本書翰の字の誤りの多さを指摘する文が記されている。

そして日付の文の真下に「南畝文庫」の印が押されている。ちなみに巻首には、「南畝文庫」と「大田氏蔵書」の蔵書印が見られる。

「南畝」は大田南畝(1749-1823)の号である。大田南畝、名は覃、字は子耜、南畝のほか蜀山人、四方赤良、杏花園などの別号がある。江戸時代の代表的な学者、江戸狂歌界の中心人物、また蔵書家としても名高い。

本書翰最後の頁に大田南畝自筆の識語「享和壬戌九月十三日於芝南神明宮前書舖取得」と書かれており、「杏花園」と署名をし、「杏園」の印が押されている。「享和壬戌」は西暦1802年、この年9月13日、53歳の大田南畝が、芝南の神明宮の前にある本屋で自ら多くの書籍の中からこの『陳元賛書翰』を見つけ、気に入

って購入したと思われる。

また、大田南畝が『陳元賛書翰』を所蔵しているのみならず、内閣文庫に所蔵している二種の『昇庵詩話』(陳元賛撰、山辺松輯)のうち、請求番号207-0508の巻頭に「南畝文庫」の蔵書印、巻末に「大田氏蔵書」の蔵書印が押され、「文化八年辛未」の日付が書かれている。文化8年は西暦1811年、この年大田南畝が62歳であり、晩年の大田南畝が陳元賛の『昇庵詩話』にも興味を持っていたことがわかる。

因みに文教大学越谷図書館に所蔵されている『昇庵詩話』の巻末には、「陳元賛詩話一卷、在昌平書庫番外雜書中、卷首有南畝文庫印、意是原係太田氏所蔵、實為希世之珍、從樞宇林公借寫藏于家、時天保甲辰春王正月 六十五翁西島長孫」とあるから、文教大学越谷図書館所蔵の『昇庵詩話』は、1844年、西島長孫⁷⁾(1781~1853)が65歳の時に、昌平書庫の番外雜書に保存している『昇庵詩話』を見つけ、巻首に「南畝文庫」の蔵書印が押されていることからもともと大田南畝の蔵書であることが分かり、この本が世に希にしか見られない珍しいものと思い、林樞宇という人から借りて書写して自分の家に収蔵したのであるということが分かった。また今回の調査では意外にも文教大学越谷図書館に所蔵の『昇庵詩話』の内閣文庫所蔵二種の『昇庵詩話』の一つを抄写したものであることが分かった。大田南畝が陳元賛の書翰や著作を収蔵したことによって、現在まで伝えられたと言えよう。

本題に戻ると、本書翰は陳元賛の真跡ではないことは明らかで、転写本としてどの程度忠実に転写されているか、或いは本来の尺牘の書式を守っているかについて、転写本と真跡を比較してみる必要がある。ちょうど2015年3月18日、京都の元政庵瑞光寺で元政上人忌に伴う遺宝展が開催されており、中に「元政上人書孝僧祈親小傳」と「陳元賛呈上人尺牘」が合装され一幅の軸物も展示されていた。この「陳元賛呈上人尺牘」はちょうど内閣文庫蔵書翰の「夷則廿二日」と同じ書翰である。

両者の字や書式を比較した結果、文字の違いが二箇所ある。第一に、陳氏真跡では「三豕渡河」となっているところについて、転写本では「渡河」の二字が「涉」の一字になっている。意味的に似てはいるが本文の文脈が分からない人が「三豕涉」を解読する場合やや読みづらくなっている。第二に、書翰の中に川澄総子の名前が二回見えるが、真跡では二回とも「川澄総子」と書いている。一方、転写本では二回目の「川澄総子」を「川総子」と書いている。省略しても意味

が変わらないところを省略する傾向が見られるのである。僅か一通について考察したものに過ぎないが、内閣文庫蔵の転写本は多少字の変更と省略が見られるとはいえ、内容上において瑞光寺蔵真跡と概ね一致するものであることが分かった。よって内閣文庫蔵『陳元賛書翰』の内容は概ね信用してもよいものと思われる。ただ、書式に関しては、転写者の都合で改行などをしており、原本の書式通りに忠実に写しているとは言えない。

江戸中期の禅僧である大典顕常（1719-1801）は、『尺牘語式』の「尺牘寫式扣版帖面式」の中に「凡書柬ニ摺本ヲ用ヒ紅單紅箋ヲ用ユルフ明季以来ノ制ニテ古法ニハ非ス然モ今ソノ制ニ從ヒ朱氏談綺ヲ祖トシ高泉和尚陳元賛等ノ傳説ヲウケ」と陳元賛の名も挙げている。しかし、本書翰は転写本であり、原本の書式通り忠実に写していないため、本稿は本書翰に関する書式的な検討をしないことにした。今後京都瑞光寺所蔵の陳元賛書翰の真跡を見ることができたら、両者の比較を試みたい。これは今後の課題としたい。

本書翰は一次資料ではなく二次資料である上、誤字も多い。本書翰の価値に疑問が生じるのも当然だ。しかし小松原氏『陳元賛の研究』によれば、元政宛ての書翰の中では、京都草山瑞光寺草山文庫所蔵のものが陳氏の真跡であり、他はすべて転写されたものであり、本書翰は「転写文だけに誤写が少なくないが、その数となると草山文庫所蔵二十八通に比較通して五十二の多数を収録してある点で尊い。草山文庫のものとの重複はわずか十一通、原翰が流逸した今日ではその史料の価値は絶大である」⁸⁾。現存している数少ない史料の中、ここにしか見られないものがあり、陳元賛と元政上人の交友を考察するのに、本書翰を除けば手がかりはない部分があるのである。この点において本書翰は非常に貴重なものである。

では、内閣文庫蔵『陳元賛書翰』にはどのような内

容の書翰が収められているのか。

二 内閣文庫蔵『陳元賛書翰』所収の書翰

陳元賛の書翰に関わる主な先行研究は小松原涛氏の『陳元賛の研究』がある。小松原氏は「現在まで調査したところによれば総数約十四種五十通を越ゆるようである」⁹⁾。と述べ、また、陳元賛の真跡について「草山文庫に寺宝として秘蔵されてある陳氏尺牘はすべて元政宛のものばかりで、元政を開山とする瑞光寺草山文庫のものだけに真跡である。総数二十八通、巻にまとめられたもの二十四通、軸物四通であって、前者は箱蓋に「陳元賛書牘」と書かれ、「開山宛二十四通瑞光寺什物」とある。これには年代月日順の整頓は施されていない。後者四通は上下一軸、或いは半切別軸とされたりしてある」¹⁰⁾と述べている。筆者が瑞光寺の元政上人忌遺宝展でみた「陳元賛呈上人尺牘」は小松原氏が言う四通の軸物の一つで、上下一軸のもの、上は「元政上人書孝僧祈親小傳」、下は「陳元賛呈上人尺牘」で合装されていたものであった。瑞光寺所蔵の真跡はさておき、内閣文庫蔵『陳元賛書翰』についての言及に関して、まず所収書翰の数は、すでに前述したように小松原氏は52通と数え、また小松原氏編の陳元賛年譜¹¹⁾の寛文2（1662）年以後の活動に関する記述の多くは本書翰及び瑞光寺蔵陳元賛尺牘に基づいている。さらに『陳元賛の研究』の中に本書翰についての引用が多く見られ、人名など詳しく考証しており、参考になる所が多かった。

先行研究の成果を参考にし、筆者はまず所収書翰の宛先及び落款の日付を一つの目印とし、これによって書翰を分け、順に番号を付けてみた。番号と日付のほか、それに対応して、書翰の内容を固有名詞などのキーワードで示し、さらに陳元賛年譜とのかかわりを明記し、以下の表のように整理してみた。

表一 内閣文庫蔵『陳元賛書翰』キーワード表

番号	日付	キーワード	陳元賛年譜における書翰参照の有無
No. 1	「季春六日」1662/3/6	「仲春二十三日深草訪元政師不遇」, 「謝惠香俎」詩, 「角倉市丞子」	「二月二十三日瑞光寺元政不在, 元政師不遇詠」あり, 「仲春二十三日深草訪元政師不遇」の詩による
No. 2	「沾洗八莫」3/8	「尊諭九日之午掣引調角倉子謹遵鈞命」	「三月八日, 元政と吉田玄順会面の打合」 「三月九日三条の玄順邸訪問」と, 参照あり
No. 3	「暮春中浣九日」3/19	「吉田宅面議」, 「四條道場浄舎」, 「再晤吉田宅面商」	年譜に言及なし
No. 4	「孟夏四月」	「所論四條僧舎之居」	年譜に言及なし
No. 5	「季春望」3/15	「吾師汲引吉田宅識面」, 「所伏賃居之事」	年譜に言及なし
No. 6	「孟夏十二」4/12	「懷師拙喙」詩	年譜に言及なし

No. 7	「夏孟中浣四日」4/14	「兼承龍孫一隊」, 「文與可『丹淵集』」, 『雲濤集』, 「十七日得晤尊顔」,	年譜に言及なし
No. 8	「乾月六爻」	「尊翰垂諭以貴冗改期十八日」	年譜に言及なし
No. 9	「孟夏十九日」4/19	「去晩所託與市丞公密議之事」, 「又所伏榷油之事」	年譜に言及なし
No. 10	「孟夏浣九日」4/19	「榷油一箇賚貺」, 「出于市丞公家藏之醇品」	年譜に言及なし
No. 11	「壬寅孟夏廿二莫」 1662/4/22	「榷油」, 「不才欲廿四日五時天霽風活躬問安於寶山」, 「謹賦節々高律一章」	年譜に言及なし
No. 12	「孟夏廿五日」4/25	「去日抵寶山」, 「川澄文総二令甥」, 「寺房賃金」	年譜に言及なし
No. 13	「孟夏廿六」4/26	「姑賃一二月雖可然一兩月後未必又有他處也」	年譜に言及なし
No. 14	「仲夏二日」5/2	「予父子昨遭地震」, 「明午吉田氏之晤必然幸勿失期可也」	「五月一日, 大地震, 父子曉まで彷徨, 山城大地震詠。」「二日, 元政より安否の使者。返信す。」「三日, 玄順邸へ地震見舞訪問。」と, 参照あり。
No. 15	「地臘節」5/5	「昨承大恵未提之事吉田氏家得其所」, 「豚兒富士松」, 「尊暇中庸倭音希誨讀一二章」, 「天雨頭重腰疼」, 「文昌圖一軸希善置之」	「五月五日, 元政へ文昌図を贈る。」と, 参照あり。
No. 16	「端六日」5/6	「豚兒富士松九條大閣急欲只口一見有別議」	年譜に言及なし
No. 17	「仲夏下浣三日」5/23	「日者小頑避地寶山」, 「究覽返壁不佞之遷居此月晦日」	年譜に言及なし
No. 18	(27日)	「僑遷之事不意又成画餅」, 「抑前吉田氏託不佞題顔作記今已成就度彼不能自解吾師明廿八日午前過吉田宅解與彼聽」, 「問荷」詩	年譜に言及なし
No. 19	「始月一日」	「来吉田宅再議一急務」	年譜に言及なし
No. 20	「仲夏十七日」5/17	「華光寺為不佞賃居之保人」, 「希慈駕貴臨吉田宅」	「日宗華光寺日梵を借家保証人となす」と, 参照あり。
No. 21	「仲夏廿七日」5/27	「吉田宅」, 「西湖遊覽志」二冊伏蒙	年譜に言及なし
No. 22	「季夏二日」6/2	「吉田宅」, 「欲抵寶山觀蓮」, 「暫遷居行福庵」	「五月三十一日(この頃) 四條行福庵へ移居」と, 参照あり。
No. 23	「季夏十七日」6/17	「昨抵寶山吟玩終日」, 「葛粉」	年譜に言及なし
No. 24	「林鍾廿三日」6/23	「吾師熱侵肺金」, 「所示白蓮雅什二篇愛蓮說一首」	年譜に言及なし
No. 25	「林鍾廿六日」6/26	「前愚作愛蓮說我體也今倣周子體復作一首」, 「磁甌一奉獻佛母老夫人」	「六月二六日, 愛蓮說成る。」と, 参照あり。
No. 26	「夷則五莫」7/5	「惠宮崎麥紗壹囊羊角虹一盤」	年譜に言及なし
No. 27	「首秋九日」7/9	「示竹葉庵佳吟十首」	「七月九日 竹葉庵詩十首」と, 参照あり。
No. 28	「夷則十日」7/10	「餽首貳盒壹以奉佛母老安人壹以奉吾師」	「一〇日, 元政と母妙種へ孟蘭盆の贈物餽頭」と, 参照あり。
No. 29	「孟秋十四日」7/14	「厚貺瓠脯壹箱」, 「孟蘭盆歌」	年譜に言及なし
No. 30	「仲秋廿七日」8/27	「此月終不佞有尾州之行」	年譜に言及なし
No. 31	「季秋八日」9/8	「明日登高寶山」	「九月九日, 瑞光寺訪問, 重陽節贈物松茸」と, 参照あり。
No. 32	「季秋廿四日」9/24	「楞嚴經一部五冊久借」	年譜に言及なし
No. 33	「季秋廿八日」9/28	「所約尊作之叙草々幸上」	「九月二七日, 元政陳京邸訪問。元元唱和集の自序の添削を乞う」と, 参照あり。
No. 34	「仲冬望暮」11/15	「二旬晤曠」, 「知師違和未復」, 「金苞一簍」, 「叙楮領訖一二日録當奉上」, 「大雪小雪」詩	年譜に言及なし
No. 35	「仲冬廿二日」11/22	「元元唱和二叙今已録完連日塵冗草々而已」	年譜に言及なし
No. 36	「臘月十三日」12/13	「榷油久約」	年譜に言及なし
No. 37	「殘臘廿五」12/25	「經旬不接」, 「金苞一簍脯棹一盒」	年譜に言及なし
No. 38	「孟陬穀日」1663/1/8	「特遣豚兒代賀」, 「茗甌壹」, 「玉蘭筆貳管」	「一月, 仲富士松瑞光寺へ代賀」と, 参照あり。
No. 39	「孟陬廿二日」1/22	「界歲不晤」, 「燄摩天」, 「馮用蘊北海集二冊鐘敬伯稿一冊」, 「返壁」, 「雙星詠拙稿」	「一月二二日, 元政へ, 北海集等返却」と, 参照あり。
No. 40	「仲春」(2月清明節)	「春分一晤」, 「轉盼間又值清明節」, 「騷壇荆棘」, 「薯蕷拾五本」, 「茨菇一盤」	年譜に言及なし

No. 41	不明	「偃月腐皮参拾片」, 「初八日晨後當抵寶山」, 「阿耨池蓮白者希惠一枝持帰嘱々」	年譜に言及なし
No. 42	「夷則廿一日」 7/21	「盆前塵務匆匆」, 「啓明晨抵寶山」	年譜に言及なし
No. 43	「夷則廿二日」 7/22	「昨約抵寶山」, 「武野新助之友」, 「欲得拙筆」, 「令甥川澄総子」	年譜に言及なし
No. 44	「孟夏晦」(4月末)	「昨晡始歸」, 「頑兒寄學寶山」	年譜に言及なし
No. 45	「辛丑小春四日」 1661/10/4	「過蒙和集一部六冊遠貺朗誦再三莫文苑之楷式 也」, 「愚父子上洛之事未有定期」	「一〇月四日, 元政へ上洛の心を書信」と, 参 照あり。
No. 46	不明	「昨歳去尾州以世故羈留今首夏四日始抵京洛」	年譜に言及なし
No. 47	(杜若花盛開の時) (五月~六月)	「令高徒来代書賃房寺状」, 「寶山杜若花想今盛開」	年譜に言及なし
No. 48	不明	「約今晨趨法座」, 「恐雨」, 「遣頑兒代申憲意」, 「尾 州篋一把小孟勞一柄」, 「糕飴壹盒」, 「觀海拙吟一 律」	年譜に言及なし
No. 49	「寛文丙午(1666)元 朔二日立春」	「寛文丙午元朔二日立春發穎」, 「蠶」	「一月, 元朔二日立春發穎詠」と, 参照あり。
No. 50	「季冬廿日」 12/20	「仲冬分手不覺歳暮」, 「竜纏壹舳仙舂貳束」	年譜に言及なし
No. 51	「季冬廿一奠」 12/21	「遠承厚貺玉延壹盤」, 「歳暮塵務旁牛」	年譜に言及なし
No. 52	「丁未孟陞六日」 1667/1/6	「去冬一別」, 「無耐公私塵冗了無寸暇」, 「容孟陞 末旬時以参法座」, 「人參五拾茎大筋一對」	「一月六日, 元政母子に「慈具人參五拾荒二大 筋一對」を贈る」と, 参照あり。
No. 53	(1659/10/3)	「鄙言一律以代謝」, 「鄙言貳首」(『身延行記』に も見える)	「一〇月三日, 元政へ送行詩。」とあるが、『身 延行記』による。
No. 54	「夷則廿七日」 7/27	「馮北海集二冊惠借容覽奉璧」	「七月二七日, 元政より馮北海集二冊借用」と, 参照あり。
No. 55	「孟秋晦」(7月末)	「不佞有一緊要急務必不可已者與師酌議」	年譜に言及なし
No. 56	「仲秋十二日」 8/12	「仲秋睽晤」, 「道體尚未痊愈」, 「枚乘七發」, 「乱 珠五十枚」	年譜に言及なし
No. 57	不明	「既望承慈駕賁臨敵寓偶因薄冗往二條不獲晤師遺 念多々近日未省道體康泰 ※不全	年譜に言及なし

(内閣文庫蔵『陳元贊書翰』及び小松原編陳元贊年譜を基に, 筆者作成)

筆者は原則的に書翰の落款の日付を基準として, 書翰を分けて順に番号を付けたが, 本書翰の中に日付の省略や内容の省略があるため, 日付は見られないものも一通の書翰として例外的に番号を付けた所も少なくない。例外は全部で九点あり, 以下のとおりである。

例外1, 表のNo. 1日付「季春六日」の書翰に「仲春二十三日深草訪元政師不遇」のような日付が見えるが, これは詩のタイトルで, 尺牘の落款の日付ではないので, これに番号を付けないことにした。

例外2, 表のNo. 18の書翰を「炎天遠隔」から始まり, 「問荷」の詩を終わりとし, 宛先も日付も見えないが, 文中に「抑前吉田氏託不佞題顔作記今已成就度彼不能自解吾師明廿八日午前過吉田宅解與彼聽」とあり, 「作記」という語が見えており, この「記」というのは恐らく陳元贊著『会心軒記』(『元元唱和集』所収)のことでありと考えられる。「託」という語から, この『会心軒記』は吉田氏の依頼で陳元贊が著したことが分かる。『会心軒記』が完成した際に, 吉田氏がその内容について理解できないだろうと推測した

陳元贊が, 元政上人に明日28日の午前中吉田宅に行って説明してほしいと頼んだ書翰である。この「明日廿八日」からこの書翰は27日のものと推測ができるので, これを一通の書翰とみてNo. 18とした。

例外3, 表のNo. 41の書翰は「昨承」から, 「阿耨池蓮白者希惠一枝持帰嘱々/政師即照 俗子陳元贊(花押)」までとした。日付は見えないが, 宛先と署名をしているため, これを一通の書翰と見て, No. 41とした。

例外4, 表のNo. 46の書翰は, 「昨歳去尾州」から「謹此布復」まで, 内容的には二通の書翰であると思われるが, 日付も宛先もなかったため, とりあえずこれをNo. 46とした。

例外5, 表のNo. 47の書翰は, 「頃承」という言葉から, 「特筆 寶山杜若花想今盛開小奴回乞/ 賜一二茎特歸聊供清玩勿吝是幸」という文までとした。これも明らかな日付は見られないが, 「杜若花想今盛開」という季節の言葉から「杜若の花が盛んに咲く時」つまり五, 六月ではないかと推測し, No. 47とした。

例外6, 表のNo. 48の書翰は、「恭啓／嚮於敝寓匆匆分手（以下略）」から、「観海拙吟」の詩までとした。これも日付が見えないが、恐らく一通の書翰ではないかと思われるので、No. 48にした。

例外7, 表のNo. 49は詩二首のみのものである。「寛文丙午元朔二日立春発穎」という日付が見えるが、これは詩のタイトルでもある。「寛文丙午」は1666年元政上人が亡くなる二年前の年で、時間的に前のNo. 48の書翰に属するとは考え難いため、詩二首のみだが、これを独立させ、No. 49とした。

例外8, 表のNo. 53の書翰は、「大明戴髮俗子陳士昇悚息和南」から、「昇恭肅和南」までとした。中に見える七言律二首は元政『身延行記』十月一日の條に載っている元政上人への送行詩と同じである。これは万治2（1659）年10月3日陳元賛が元政上人と二回目に会った時に、翌日京に帰る元政上人に、陳元賛が詩二首を添えて送った書翰であると推測できる。日付はないが、これを万治二年十月三日のものとし、No. 53とした。因みに、元政は『身延行記』十月一日の條に詩のほか、「元賛送行の詩。ならびに書簡贈り物も有り書簡は文しげければここにのせず」と言っており、これについて小松原氏は「元政が繁ければ載せずと割愛した尺牘は南畝文庫旧蔵の「陳元賛書簡集」（内閣文庫現存）にある¹²⁾とすでに指摘している。筆者はNo. 53の書翰に見える詩と『身延行記』の送行詩の文字の違いを確認した。『身延行記』元賛送行詩第二首の最後の一句には「松枝西向報師旋」とあるが、No. 53書翰では「向師旋」とあり、「報」の字が抜けていたことが分かった。

例外9, 表のNo. 57は内容からみて写しかけの書翰であり、日付も宛先もないが、これをNo. 57にした。

上のように内閣文庫蔵『陳元賛書翰』について筆者が表を作り、整理を行った。その成果として、表から少なくとも以下の三点が言える。

其の一、表の前半部分、No. 1からNo. 39までの書翰は寛文2年春3月から翌年1月主に詩文の唱和を中心に元政上人と交際した書翰である。No. 4, No. 18（日付不明）、No. 19の三通を除いてすべて日付順に並べて書写したものであることから、本書翰を転写した人が年月順に書写している意図が見られる。後半の部分では寛文2年より前の書翰が二通（No. 45の1661年とNo. 53の1659年の書翰）が見られる。また日付不明の書翰も多い。概ね月の順にはなっているが、転写者の判断の間違いなのか、何らかの事情があったの

か、後半部分について、必ずしも年月順になっていない。今後作成年月についての再整理を必要とする。

其の二、内閣文庫蔵『陳元賛書翰』所収書翰の数に關しては、表では全部でNo. 1～No. 57としたが、内容から見て抄写した人が日付を何らかの理由で省略した可能性もあり、筆者は内閣文庫蔵『陳元賛書翰』に収められた書翰は少なくとも57通以上あるとみている。

其の三、『陳元賛書翰』の記述と小松原氏編陳元賛年譜を検討してみると、本書翰の内容について、小松原氏の『陳元賛の研究』は『陳元賛書翰』を資料として多く挙げているが、年譜に反映されているものは僅か18通である。年譜に反映されなかった理由の一つは、恐らく日付の不明確にあると思われる。本書翰の多くは月日のみ記しており、年まで記しているものが少なく、今後、他の資料と総合的に考え、小松原編陳元賛年譜を補う必要があると思われる。この点については今後の課題とする。

おわりに

陳元賛の著作を集めたものとして衷尔鉅輯注の『陳元賛集』（遼寧人民出版社、1994年）があるが、その中に本書翰は収録されていない。前にも述べたように、本書翰は転写文だが、内容的に信用できるものであり、陳元賛と元政上人との交友のみならず、陳元賛の生涯と思想の研究においてもその史料価値が絶大である。本稿はまず、内閣文庫蔵『陳元賛書翰』の識語の考察で、本書翰は1802年大田南畝が本屋で手に入れたもので、江戸後期の大家文豪大田南畝が陳元賛のことに興味を持っていたことがわかった。さらに、意外な収獲として、南畝文庫蔵『昇庵詩話』を底本に転写された本が現在文教大学越谷図書館に所蔵していることが分かり、大田南畝の影響もあり、少なくとも江戸後期までは珍重されてきたと見られる。

本稿はあくまでも初歩的な考察ではあるが、今後の課題とすべき点が多く見つかった。本書翰を検討することによって、今後どのように研究を展開していくかは、たくさんの方が見えてきた。

今後の課題として、書翰に「角倉市丞」や、「吉田宅」などの語が見えている。角倉一族といえば京都屈指の豪商であり、蔵書で有名である他、医者も輩出しており、朝廷と密接な関係を持つ。角倉了以、素庵父子の代では、河川開削、土倉の経営や安南貿易（朱印船貿易）に関わって、幕府に貢献した家柄である。

『元元唱和集』に陳元贊の「即席謝吉田市丞公厚款」の詩があることから、元贊は吉田宅に招待されたことが分かる。本書翰にも陳元贊と吉田市丞に関する記述がある。それによると、陳元贊は、京都において角倉市丞（角倉一族の一人で、本姓は吉田）が山城国随一の蔵書家であり、徳も才能も兼備した人物であると聞いた。そして元政上人との平素からの親交を利用して彼と知り合おうとしている。ちなみに、小松原氏はこの角倉市丞は角倉素庵の子玄紀甫庵の三男、会心居士である玄順閑清のこととみている¹³⁾。今後元政上人を介して陳元贊と吉田氏との関わりについて考察していきたい。また、既に述べたが、今後『元元唱和集』、元政上人の『草山集』、瑞光寺草山文庫の陳元贊の真跡、及び他の関連資料などを総合的に考察し、当時詩壇の美談である陳元贊と元政上人の交友についてより具体的に明らかにする予定である。

注

- 1) 『諸士伝略稿』は現在名古屋市立鶴舞中央図書館特別集書に所蔵されており、尾張藩士の中山和清(1765-1829)の著作である。中山和清という人物については『名古屋市史』(人物編第二)中山七大夫の条に、「中山七大夫、幼字新之助、又大作、初名は清寛、字は玄容後和清、字は任夫と改む、訓練、又後凋軒の号あり、父は清幸、母は高木氏、明和二年正月二十四日生る」とある。また著作について「著す所性高公行実、白世子別伝、君臣言行録、尾藩外史略稿、諸士伝略稿、尾藩老談録、禁殉有後集、孝子略伝、先師澹齋長沼君行状集成定本、先師高弟述、黄帝握奇経辨、諸葛武侯八陣図石碩論、

後凋軒漫録等あり」とあり、著作は豊富であった。

- 2) 「陳元贊、字義都、號既白山人、明厠林人(儒林姓名録、諸家人物誌)、幼而聡敏、通經史、又善書宗趙孟頫、大有風致(人物誌)、(中略)、既 敬公聞其名、以客招之、優待充顧問、元贊感知遇盡心無遺(姓名録)、(中略)、慶安三年、口公薨、口瑞龍公、葬之於水野定光寺、墓碑題云、從二品前亞相尾陽侯源敬公墓、凡十三字、元贊實奉命書之(寺院畧傳)、(中略)、先是元贊屢往來平安、與石川丈山、鶴飼真昌、及僧元政等、以文事結交、皆推元贊為白眉、其贈答詩文、見厠林詩文集、及元々唱和集、(姓名録、古老談)、(中略)、十一年六月九日、病歿於城東九十軒町、(佳境遊覧、蓮左舊記、古老談○統崎人傳以為終於京、誤、今從所引諸書)年八十五、(佳境遊覧、身延紀行)葬建中寺、(以下略)」(『諸士伝略稿』名古屋市立鶴舞中央図書館蔵)
- 3) 小松原濤『陳元贊の研究』雄山閣出版社、1972年、3頁。
- 4) 改行を表す。以下同じ。
- 5) 「龍翔」について、不明。
- 6) 小松原濤『陳元贊の研究』、288頁。
- 7) 西島長孫：安永九年生まれ、名は長孫、号は蘭溪、別号は坤齋、江戸後期の儒者、著作には『坤齋日抄』などがある。
- 8) 小松原濤『陳元贊の研究』、287頁。
- 9) 小松原濤『陳元贊の研究』、286頁。
- 10) 小松原濤『陳元贊の研究』、287頁。
- 11) 小松原濤『陳元贊の研究』、361頁。
- 12) 小松原濤『陳元贊の研究』、205頁。
- 13) 小松原濤『陳元贊の研究』、246頁。

主な参考文献

- 小松原濤『陳元贊の研究』雄山閣出版社、1972年。
 玉林晴朗『蜀山人の研究』東京堂出版、1996年。
 蔣竹菴主編『書信用語詞典』上海辞書出版社、2002年。
 森洋久編『角倉一族とその時代』思文閣出版、2015年。